



嬉泉の新聞 第47号 2002年(平成14年)1月発行(年3回発行)

発行所=社会福祉法人嬉泉

東京都世田谷区船橋1-30-9(〒156-0055) TEL 03-3426-2323

http://www2s.biglobe.ne.jp/~kisen/ E-mail:kisen@kisenfukushi.com

発行人=石井哲夫

編集人=小山裕子

## 『すこやか』にふさわしい暖かな福祉をめざして

社会福祉法人さがみ愛育会 すこやか保育園園長 小林 祐子

私がおります相模原のすこやか保育園は、昭和44年の開園時に石井先生にお願いして、当時のすこやか学園の名称を半ば強引に譲り受けました。定員は160名ですが、いつも定員以上の入園児がいる状況の中で、常時20名以上の何らかの障害を持つ子どもを受け入れ、いつもいろいろな子どもがワイワイと元気に過ごしています。遊びは泥んこ遊びが中心です。春から夏、そして初秋迄パンツ1枚で思いっきり水と泥、絵の具等にまみれて遊びます。初めは泥んこ遊びが苦手な子ども、思いっきり開放的に遊ぶ姿をみせるようになります。この遊びの大切さを教えてくれたのは、自閉症の子どもでした。雨上がりの水溜りで、その子が陶醉して遊ぶ姿に他の子ども達が吸い寄せられていったのです。今迄の型にはまった保育の意味を職員は問われるきっかけになりました。

養護学校を卒業した彼らの行き場として保護者に請われて、作業所、活動センターを設置し、重度の人が通う木工や陶芸等の作業、また喫茶店、弁当屋に取り組むようになりました。そして今年度保育園の老朽化に伴い、190名定員の保育園と30名定員の通所更生施設のびやか(陶芸や木工等の作業所を吸収して)を設立しました。福祉施設の合築では、乳幼児施設と高齢者施設が多いのですが、保育所と障害者の施設は珍しがられて見学者が多く、子ども達も青年達も見られることに大分慣れてきた今日この頃です。施設の青年達と保育園の子ども達との交流は色々な形で行われます。お誕生会、運動会、エアロビ等の楽しい催し物や、青年達が作業として取り組んでいる陶芸、缶プレス、牛乳パッ

クをちぎって葉書にする紙すき等の作業に、子ども達が参加して交流しています。「缶プレスって大変だね、力があるね。」いとも簡単に体重90キロの巨漢が押すペダルを、子ども達は感心しながら見えています。今では笑顔で交流をするようになってきました。(人って怖くない、関わるって楽しい)両者がそう思ってくれるのが大切なのだと思っています。

これからの福祉施設は地域との交流を大切に、応援をして貰い、一緒に産み出していく施設になることが重要です。苦情解決制度や第三者委員会と諸制度が作られ、当施設も取り組んでいます。色々な方と関わりあえる地域に根ざした福祉の拠点となり、子ども達、青年達そして職員も人の温かさを感じ、互いに支援し合える関係を大切にしていきたいと思っています。

今日は保育園、更生施設のみんで餅つきをしました。地域のおじいさん、おばあさんも40名ほど参加されました。93歳のおじいちゃんが腰をしゃんとし昔とった杵柄のかっこいい姿に皆で拍手し、皺だらけのおばあさんの手がつるつるに丸まった鏡餅を作るのに感心したり、子どもも青年も地域の方々もお餅を美味しく笑顔でほおばる姿は微笑ましく、これからもそんな関係を大切にしていきたいと思っています。

この新施設は、子研で石井先生に師事し、その後移った相模原で、障害児保育を開拓しつつ、ゆったりとくつろげる施設づくりを目指しながらも病に倒れた亡き主人、小林和雄の思いが託されています。今後は小林和雄の「関係論」を基本とした保育と療育を模索しつつ、実践をしていきたいと思っています。

# 社会福祉援助論

石井 哲夫

— その10 —

## 生活基盤と社会福祉サービス

日本は戦後、アメリカの影響を大きく受けてきた。アメリカからもたらされた西欧的民主主義は今やわが国の国是となってきた。遅ればせながら、利用者中心思想が、社会福祉援助現場に浸透してきている。数年前に知的障害施設や認可外保育施設における職員の暴力行為が摘発され、マスコミを賑わせたことが、今や夢のごとく誰もが利用者の人権尊重を唱えだしている。社会福祉サービスの質的向上の中には、社会福祉施設におけるQOLの向上が含まれていることは言うまでもない。そこで今抱えている疑問は、地域における援助体制を強化するための施策を採ろうとも、大方の均質な福祉予算の建て方を改めずに総量減額を行うのであれば、援助困難性の高い人が不利になる、とい

うことである。この問題を変えるためには、少なくとも現状の施設生活基準を下げずに、援助困難な入所者へのオプション的なサービスを競争的に創出していく政策が求められてくるものといえよう。もちろん施設から地域へとサービスの重心を移行する政策は大切で、障害者のいる家族やグループホームが、地域において安定した暮らしを送ることが出来るようにするものである。そこにはノーマリゼーションに向かう社会活動や社会的な自立を促進していく療育的な援助が必要になるはずであるが、細かく手を掛けねばならない重い障害者をボランティアとか、ホームヘルプなどという安価な生活のケアで済ませるという制度では、よい競争を生むことにならない。いま、より高い質のサービスを社会福祉施設の中で実現していかなければならない。

また、こういうシステム論や市場原理で自由化される福祉サービスの質的保証は、第三者評価機関で行うことになるが、良いサービスを求めることよりも、低サービスをチェックする機能に成りかねないことを心配している。

今我々の周辺で「私はよい福祉サービスを行ってきます」という宣伝臭を感じる事業も目に付くようになってきている。本当にしっかりとっている仕事をしているところは、宣伝を恥じるような気風があつて、ごく普通に援助に励むという職員集団のアイデンティティが出来上がっているものである。

やや時流に逆らうことになるが、この節の若い人たちが、社会福祉援助の仕事についてもすぐに役に立つというものではなく、一定の期間かなりハードな研修を受けることが必要と考えている。このハードな研修のポイントとは、対応困難な自閉症のような人たちに對して、共に生活しながらその気持ちを傷つけないようにしながら、必要なことをさせることが出来る生活基盤を作る力を引き出すことなのである。

というのは、今まで客観的とか合理的と言われて来た行動分析(もう古い話になるが)では捉えられなかった名人芸のような自閉症との情緒的な交流とか、情動調律といったたぐいの援助関係等は、我国に根づいている生活の中での安定した親子関係による人間観から学び取られてくることを改めて実感し始めているからである。戦後アメリカでは、社会福祉学においても多様な研究や理論が先進的に開発され、これが我が国にもたらされてきた。しかし、生活基盤の悪化をもたらす風潮を防げなかった。日本には基本としての生活を律する「儒学」や「心学」が存在していた。また欧米には、基礎となるキリスト教の生活基盤があり、その上に多様な実験や実践の操作的な学問を發展させてきた。今こそ広い意味で、社会福祉援助という人間生活の向上を図る理念を追求する場合の基盤として、入所施設の中で、新たな生活基盤についてのアイデンティティを確立していかなければならない。またそこから地域へのサービス方法が鮮明になってくるものとも考えているのである。



## 「ホームヘルプ」にヘルプ

石橋 悦子

おおらか学園に在籍しているRさんが、この秋に区のホームヘルプサービスを受けることになった。Rさんは現在34歳の女性で、母親とふたりで暮らしているが、その母親が急に入院することになったためである。母親から電話連絡を受け、早速、担当のS福祉司さんに連絡をとった。

S福祉司さんは、Rさんをはじめ多くのケースの担当福祉司として、本学園が3年前に開設したときから深く関わっていただいている。特に利用者に対する援助内容には積極的に関心を向け、必要に応じて学園の見学や私たちと話合う機会をもって下さっていた。今回の事態に対しても、Rさんにとってどのような体制が望ましいのか、学園側も加わり、S福祉司

さんを中心として検討が行われた。Rさんは、本来明るくて人なつこい性格で、ある程度の社会性や生活能力をもつ一方で、自分に対する人の態度に過敏で、相手の言動に不満や不安を感じると、攻撃的な態度になりやすい。これまで

も、周囲の人との間でトラブルを頻発させ、Rさん自身も深く傷つき、人への不信任は相当なものであった。そのため、一時的とはいえ、見知らぬ他の施設を利用することは、Rさんの不安を増し、状態の悪化を招くことが予想された。検討の結果、日中はこれまで通り学園で過ごし、夕方は2時間のホームヘルプサービスにより、夕食、洗濯、掃除などRさんの生活のサポートが行われることになった。また、夕方以降の時間は職員が電話でRさんの話し相手になるようにした。その際、S福祉司さんの仲立ちで、Rさんに対する接

し方のポイントを学園側からヘルパー派遣会社に具体的に伝えるなど、必要に応じて連絡を取り合い、担当ヘルパーの方々は、それを受けて的確に対応してくださった。また、Rさん宅を訪問しても度々不在であったり、寂しさのためRさんが家をとび出してしまったという時もRさんを待ち、時にはサービス終了時間を過ぎても帰宅したRさんを温かく迎えて下さった。このような親身なサービスの

もと、Rさんは何とか母親の退院までもちこたえてくれた。既存のサービス体制の不十分さを関係者が協力して、その人的要件やサービス内容について個別的に補っていく必要性をRさんのことを通して強く感じた次第である。

(おおらか学園)

## 泉わく・ワク会のご紹介

小山 裕子

昨年、福祉活動センターよろこびを立ち上げた。この事業の主な活動の一つである、自閉症や発達障害の人達への理解を広げたい、という啓蒙活動は福祉講座・専門講座などの形で、発足当時から続けている。

そしてもう一つの主な柱であるボランティア活動に関しては、自閉症の子ども達に直接関わるボランティアを養成したい、という思いから、昨年は手始めに「自閉症の子ども達と関わる体験講座」という形で単発の講座を何回か設けた。今年は、来年度の名称「泉わく・ワク会」の立ち上げに向けての準備期間として八月から、月一度二時間の活動を行っている。

『泉わく・ワク会』という名称には、「滾々と湧き出る泉のよう」にいろいろなアイデアが沸き起こり、そこに集まる人達がワクワクする体験ができるように、「のど」の渇きを泉で癒せるように、この会に集う子ども達もボランティアの人達もこの会で気持ちが癒されるように」という思いが込められている。今はまだ、毎回四・五名のボランティアの人達の参加ではあるが、この手造りの会がこの先、自閉症を理解できるボランティアさんを沢山育て、家庭支援やひいては自閉症児の生活が少しでも豊かになることの一端を担えるようになるという、という夢を抱いている。

(子どもの生活研究所)

私たちの  
うざと  
赤塚からの発信

地域の保育園

## 小学校との交流

友田 篤

ここのところ相次いで地域の保育園と小学校からの交流と相互学習のお申し出をいただきました。

このことは、かねて願っていたこととで、大歓迎。別の保育園とはかつて機会もあったので音楽とゲームを中心の交流会をしました。

小学校とは初めてのことで、担任の先生たちとも相談し、始めに園利用者の希望を募って学校の作品展示会に参加し自然に出会う形でスタートしました。また、6年生ということも考え、私がまず3クラス90名の生徒に園のビデオを持ってオリエンテーション。校長以下先生方も参加して下さり、その上でクラスに分かれての見学会を実施したところです。

## 赤塚保育園との交流会

坂田 朗

保育園からの申し出を受け、赤塚福祉園のたのしみグループと赤塚保育園のぶどう組との音楽交流会を行いました。

交流会ではたのしみグループの演奏・園児のダンスの披露・全員で楽器を使ったゲームを行なうなど、お互いが抵抗なく交流を持てるような内容にしました。

たのしみグループの演奏の発表で利用者は、普段練習している内容にも関わらず、人前での演奏・子どもたちの元気の良さに圧倒され、いつも間違えないところで聞

こうした機会を通して子どもたちの心に何かしら芽生えるものがあれば、さらに家族や地域を巻き込んで、きっかけを提供できればと校長さんや担任の方たちと話し合っているところです。

違えてしまうなど言葉に言い表せないような緊張感を持って演奏していました。演奏が終わった際の不安堵感は計り知れないものだったようです。その利用者とは対照的に、子どもたちは緊張していないながらも会が進むにつれ緊張がほぐれ、普段の保育園での様子を慣れない場所で見せてくれました。

初めての交流会だったので、障害者への理解を深めるほどの交流は生まれませんでした。そのきっかけにはなったように思います。



交流会の様子

小学校の生徒や

先生たちと

武田 香代

下赤塚小学校のみなさんが見学にやってきました。始めはみんな緊張気味でしたが、帰る頃にはすっかりはぐれて握手を求めてくる子どもたちも……。福祉園の説明をする大人たちに気合いが入っていたため、説明を受けている小学生たちにはすごい情報の量だったと思います。それでもさすがに6年生、みんな一生懸命に聞いていました。

また、通園バスの乗降を車椅子で実際に体験しましたが、こちらは「コワイ！」と悲鳴を上げつつも、福祉園での日常を楽しみながら体験できたようです。見学後の質問コーナーでは、「天井からぶら下がっているものは何?」（電気コード）というものから、「どういうお話をしたらみんな喜んでくれるの?」と小学生らしい素朴な疑問も。「来年の福祉園祭りには遊びにくるよ」「学校終わったら遊びにきていい?」と地域との交流でとても嬉しい第一歩を踏み出せました。



## 私たちの袖ヶ浦からの発信

アトリエ・アウトス  
共同巡回展

戸屋 隆

平成十三年十月十五日から十一月五日まで、アトリエ・アウトス、メキシコのベラクルス州立大学、パントラ自由美術学校の生徒の方々、筑波大学付属聾学校造形芸術科の方々と共同展示会が、東京、神戸、京都の3都市を巡回する形で行われました。この共同展のお話しは、東京の会場である「セッションハウスガーデン」のオーナー伊藤藤さんに、知人である「虹の家」の元職員森田さんが、アトリエ・アウトスを紹介して下さいて実現しました。

パントラ自由美術学校は生徒たちのほとんどが障害を持つ人たちですが、年齢に制限なく誰でも入学出来、創作活動が出来るようにと、メキシコ在住三十五年の五

次勝先生が二十二年前に創設しました。学校の近隣の山から、ただ同然に得られる木々を材料に彫刻を教えています。五次勝先生は袖ヶ浦のびろ学園の門の壁画を制作してくれたメキシコオハカ州在住の画家、竹田慎三郎先生とも交友関係にある方です。

五次先生はアトリエ・アウトスの作品を観て「穏やかな気持ちになる」と感想を述べてくれましたが、一緒に来日していた五次先生のお嬢さんも同じ感想でした。偶然にも同じ感想を聞き、彼らのもつ作品のパワーを改めて感じさせられました。また、今回の共同展示会を観に来てくれた人たちの傾向としては、プロのアーティストや美大の学生が多く、彼等からも高い評価をいただきました。

東京会場でのオープニングパーティーにアトリエ・アウトスを代表して市川浩志さんが出席しまし

た。後援者でもあるメキシコ大使館、大使ご夫妻も出席され、五次先生手作りのメキシコ料理をいただきましたながらの楽しいパーティーでした。

今回の作品展は五次先生や「セッションハウスガーデン」の伊藤さんなど多くの素晴らしい人たちと交流が出来たこともさることながら、市川さんがいろいろな人たちとお話しが出来て良かったこととパーティーの帰りの車中で独り言のようにつぶやいたのを聞き、喜んでもらえたことがとても良かったです。

(袖ヶ浦ひかりの学園職員)



市川浩志画

のびろ・ひかりの

合同運動会

高山 牧子

去る十一月七日に「のびろ・ひかりの合同運動会」が開催されました。当日はいいの木養護学校の

校長先生、小・中・高等部の先生方、ボランティアの方々、保護者・御家族の方々に多数のご参加とご協力をいただきました。様々な人の協力があって、全体行事を行うことが出来るのだと改めて痛感しています。

競技では、上手にゴールテープを切ってゴール出来る人、ピンと張ったテープの前で立ち止まってしまふ人、テープを持ち上げてくぐってしまう人と、ゴールの仕方が様々でした。来年度は皆さんが上手にゴールテープを切れるようにしてゆけば良いと思います。せっかく速く走ったのにゴールの前で立ち止まり、抜かれてしまっ

ては残念です。対抗リレーでは、どちらも抜きつ抜かれつの大接戦でしたが、優勝を勝ち取ったのはのびろ学園は「すぎ・はやて組」、ひかりの学園は「さくら組」でした。

『合同運動会』も毎年、回数を重ねるにつれ、皆さんが落ち着いて状況に参加していると感じました。また、日頃の日課を工夫して、効果的に競技の練習をしたいと思

いました。

(袖ヶ浦ひかりの学園職員)



# 嬉泉トピックス

## 第三七回

### 嬉泉バザーのご報告

総務 小山 裕子

今回の第三七回嬉泉バザーは、これまでのバザーの形態をより良いものに変革した。具体的には、会場を2つにし、各会場の目的をはっきりとさせたことである。第一会場は、世田谷の烏山区民センター前広場を借用し、物品販売を主にし収益の増を目的にした。そして、第二会場は改築後初めて子どもの生活研究所を会場にし、広報活動や手作りの食べ物のコーナーを主にし、地域の方への施設開放の一步とし併せてこれまでの嬉泉に係のある方との交流を目的とした。

週間後の第二会場の日は秋晴れに恵まれ、懐かしい顔ぶれのお客様がたくさん訪れてくださった。今バザーを終えて改めて思うことは、この厳しい社会情勢の中、品物を提供してくださる企業や個人の方の変わらぬご好意がとてもありがたく感じたことだ。しかし社会情勢の変化で、売れない中古衣料などを事業ゴミとして有料で処分しなくてはならなくなった。また日常的に安い品物が手に入る百円ショップなどがたくさんできてきた。そこで今年は、中古品に手を入れて丁寧に売ったり周辺のマーケットリサーチを行って値段付けの参考にした。バザーでも福祉現場においても、今の厳しい情勢の中で目指すものを勝ち取る為に熱意や工夫が必要だと感じる。バザー収益335万4798円皆様のご協力に心からお礼申し上げます。

おいでくださったお客様のお手紙より

小野 顕

十一月四日、前夜来の大雨が明け方には嘘のようにすっきりと晴れあがった。嬉泉に着いた十時過ぎにはもうバザーがにぎやかに始まっていた。

私は嬉泉バザーに行く子どもと一緒に遊んだ宮祭りの屋台店のにぎわいを思い出す。人込みを縫ってあれこれと品定めする気分が好きなのだが、良い品物はあまりなかった。ところが嬉泉バザーはどれもこれも良い品物が格安で買えるので、よほど用心しないといつ買い過ぎてしまう。なかでも私の第一のお目当ては嬉泉パン。今年もまさきにそれを買った。食堂コーナーも素通りできない。「お汁粉ください」

「はい、百五十円です」

あずき、栗、白玉がはいった大好物のお汁粉がたったの百五十円だった？ まさか、と叫びたくなるのをやっと我慢した。

あと、買い物はどうしても欲しい物を選びに選び、アウトスや広報のコーナーも見せていただいて、家路についた。

帰宅して買い物袋からまず取り

出したのはチョコレートパン。昔はチョコ巻きなんて呼び、巻き貝のようなパンの穴にチョコレートクリームが入っているこのパンは、穴のどこまでクリームが入っているかが問題で、普通なら半分から先はがらんだものである。ところが嬉泉のチョコ巻きときたら、まだある、まだある：いちばん先っぱの細いところまでクリームがいっぱいはいつているので、大感激。嬉泉のパンはどれもみんな作り手の行き届いた心くばりが食べる側に伝わってくる。ありがとう。

嬉泉バザーの品物は買って得すること間違いなしだが、それ以上に楽しいのは作り手、売り手、買い手の顔である。私も連れ込まれて、あの会場ではきつと良い顔をしていたと思う。嬉泉バザーを訪れた人はみんな良い顔になってしまふ。物が良い以上に人を良くする魅力が嬉泉バザーにある。

そう言えば、前夜のテレビにノーベル賞の受賞者がそろって登場し、評価されたのは開発された「物」ではなく開発した「人」であることを強調していた。嬉泉バザーで私が感じたのも同じことで、そこが大切だと私は確信している。



お題其ノ巻

## 『苦情解決』

事務局長 石井 啓

Q 巻…福祉施設（保育所も含む）における「苦情解決」とは、どのようなものなのでしょうか？

A 巻…社会福祉法第82条の規定によって、「社会福祉事業の経営者（法人の理事長）は、提供する福祉サービスについて、利用者等からの苦情の適切な解決に努める」ことになりました。

そこで苦情への適切な対応により、「福祉サービスに対する利用者の満足感を高めること」や「利用者個人の権利を擁護すること」を目的に、「苦情を密室化せず、社会性や客観性を確保し」つつ、「円滑・円満な解決」を求めるためのルールづくりをすることが、サービス提供者に対して求められたのです。

つまりこれは、今後福祉サ

ビスの利用者と提供者（施設・法人）が対等の契約関係となっていく流れの中で、施設の種別によっては「措置」という利用者にとつてのあてつけの意味での「公の保護」がなくなることに對する、サービス提供者側への「歯止め」であるといえます。

Q 式…具体的には誰が苦情を解決してくれるのですか？

A 式…法人が「解決体制」を整備するには、①苦情解決責任者、

②苦情受付担当者、③第三者委員の三者を理事長が選任する必要があります。苦情解決責任者は、申し立てられた苦情を解決することの最終的な責任を負う役割なので、当然ながら施設長が担うことになっています。苦情受付担当者は、利用者からの苦情をいちばん最初に受け付ける役割なので、利用者と日常的

に接する直接処遇職員が担うケースが多いようです。第三者委員は、「苦情解決に社会性や客観性を確保する」ために、施設・法人の職員ではなく、外部の有識者などに委嘱する必要があります。

従って、苦情を申し立てるときは、まずは苦情受付担当者に伝えて、それでも解決しない場合には第三者委員に申し立てるか、あるいは苦情の内容によっては、最初から第三者委員に申し立てることになります。

## 嬉泉の苦情解決体制

| 施設／役割 | 責任者   | 担当者   | 第三者委員         |
|-------|-------|-------|---------------|
| めばえ   | 大岩香代子 | 新原衣美子 | 高橋利一 肇        |
| おおらか  | 石橋悦子  | 森下尊広  | 小沼真洋          |
| こぐま   | 小山裕子  | 外谷美奈子 | 安藤真美          |
| すこやか  | 島野雅子  | 砂田玲子  | 金子恵美          |
| のびろ   | 山根美江子 | 川相豊子  | 村田保太郎 山田美和子   |
| ひかりの  | 川相智史  | 一尾弘志  | 高原武夫 石原敦文 斎藤博 |

## 編集後記

『社会福祉法人嬉泉』という一つの法人の中に、生後二ヶ月の赤ちゃんから五十歳代の成人の方まで、発達に遅れの無い子どもから自閉症や発達障害の人や肢体不自由の方と、年齢や背負っている背景はとても幅広い。各事業所の利用者の方に必要とされている援助の形の違いはあっても、どの利用者の方にも人の中で自分自身を大事にして豊かな生活が送れるような援助を目指している。

法人が大きいので、外からは見えにくいかもしれないが、『嬉泉』は今変わろうとしている。よりよい援助やサービスを提供できるように。また、私たちが目指しているものや感じていることや分かっていたことなどを皆様に少しでも分かりやすく伝えられるように。ためらう前に実行を、ということに『嬉泉の新聞』の紙面もリニューアルしてみた。それぞれの職員が奮闘している様子をありのまま伝えられる紙面づくりをこれからも工夫していきたい。

ご意見・アドバイス・ご注文をお寄せいただけることを心から願っている。（編集人 小山）

# ひかりのタイムス

独立第41号

今号の「ひかりのタイムス」は、『夢』をテーマにして、利用者に原稿をお願いしました。皆さんはどんな『夢』を持っていますか？

## わたしのゆめ

中村すや子

サイクリングコースグラウンド  
いなげや店20かいだてづくります。  
ひかりのみなみもん  
はやみず学園2かいだてつくるか  
おねがいします。さくらぐみ  
プレハブ小しつ小べや学園しつへ  
や1かいだてつくるかおねがい  
します。

これからあさ6:37ふんに  
パンこうばうにいきます。  
チョコチップメロンきじまるめと  
クリームパンづくりと  
さんしょくパンづくりと  
ちよりそうパンづくりと



アトリエ・アウトス  
市川浩志画  
「馬アラジン」

ベーコンチーズパンづくりと  
メロンパンかわづくりと  
メロンパンかわまるめとのぼしと  
あんこだまづくりと  
ばんじゅうふきと  
てんねんこうぼパンふくろづめと  
かしぶしよつきあらいと  
あさの8:00ふんからしよくじします。  
あさ9:00ふんからせんたくします。  
ゆうがた6:00ふんからしよくじしま  
す。  
ろうどうほうしゅうお金80,000円もら  
います。

(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)

## 夢の中で…

秋山 良江

私は最近、家族と会っていない  
ので、夢の中で家族と会っていま  
す。いつか帰れる時があったら  
いいと思っています。でも、好きな  
物(本など)を見て気を、紛らわ  
そうと思っています。

私が好きなアニメはコナンです、  
コナンが好きで最近、よく見てい  
ます。

ところで、最近、放送大学をよ  
く見ます。見ていると大分、勉強  
になります。

ちなみに、私はこの頃、占いに  
凝っています。大分、面白いです。  
色々な人を割り当てては楽しんで  
います。誰が何でというのが凄く  
楽しいです。特に動物占いがとて  
も楽しいです。花占いというのも  
大分、楽しいです。

私の楽しみは本を読むことと音  
楽を聴くことです。本を読むと疲  
れます。でも、TVを見るののも  
ても、楽しいと思います。

(袖ヶ浦のびる学園利用者)

## 「将来の夢」

田中 雅也

春のひかりグループホームにいて、  
3年になります。

いつまでも春のひかりグループホー  
ムにはいないで早く近い将来  
袖ヶ浦駅前で家賃の安い  
貸しアパートで一人住まいしたい  
です。

今でもいつでも作業着は、嬉泉の  
職員に、お世話になって、一人で  
作業着のせんたく、かんそうき使  
うのやりたいけどお金が不安です。  
現在と同じでお金たまるよう  
にしたいです。

お金の事公平にしたいです。

(グループホーム・春のひかり利用者)



アトリエ・アウトス 持田想一画  
「城のある街」